

る。しかし高度リンパ節転移症例が多く、遺残再発病変に対する追加化学療法が今後の課題である。

II. 特 別 講 演

直腸癌に対する化学放射線療法と外来化学療法

帝京大学医学部外科 教授

渡 邊 聡 明

第 9 回新潟胆膵研究会

日 時 平成 20 年 9 月 27 日 (土)
午後 2 時～7 時 5 分
会 場 万代シルバーホテル
5 階 万代の間

Session I 『検査・診断』

1 胆管癌の表層拡大進展の存在診断に経口胆道鏡検査が有用であった 1 例

佐藤 良平・若井 俊文・塩路 和彦*
金子 和弘・白井 良夫・井上 真**
味岡 洋一**・畠山 勝義

新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器・一般外科学分野
同 消化器内科学分野*
同 分子・診断病理学分野**

症例は 75 歳, 男性. 上部胆管癌の疑いで当院紹介受診した. 高齢者であることを考慮して肝外胆管切除術を立案していたが, 直接胆道造影で左肝内胆管壁に“毛羽立ち状”の壁不整像を認め, 表

層拡大進展の存在が疑われた. 経口胆道鏡検査を施行し, 左肝内胆管に発赤調で乳頭状ないしは微細顆粒状の粘膜を認め, 表層拡大進展の存在を確認できたため, 肝左葉切除術および肝外胆管切除術を施行し癌遺残のない切除が実施可能であった. 直接胆道造影で胆管壁に“毛羽立ち状”あるいは“鋸歯状”の壁不整像を認めた場合には, 表層拡大進展の存在を疑う必要がある. 表層拡大進展の存在診断には経口胆道鏡検査は有用であり, 適切な術式を決定する上で考慮すべき術前検査法の 1 つである.

2 術後症例に対する ERCP の経験

有賀 論生・塩路 和彦・富樫 忠之
河内 裕介・横山 純二・青柳 豊
成澤林太郎*

新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器内科学分野
新潟大学医歯学総合病院光学医療
診療部*

近年, 術後症例に対する ERCP の必要性が増加しており, 当科での現状ならびに問題点を retro-spective に検討した. 対象は 2004 年 1 月から 2008 年 7 月までに施行した 27 症例 46 回とした. 術式は B-I 再建 10 例, B-II 再建 6 例, 胃全摘 2 例, 膵頭切除後 3 例, 胆管空腸吻合 4 例, 空腸間置 2 例であった. 使用したスコープは JF240 に加え, XK240, SIF-Q260, PCF-240I など多岐にわたっていた. 主乳頭あるいは胆管吻合部への到達率は 93 % と比較的良好であったが, スコープ挿入からの平均到達時間が 24.1 分と時間がかかり, 特に胆管空腸吻合症例では平均到達時間が 1 時間以上であった. スコープ変更後に到達に成功した症例もあり, 状況に応じてスコープを選択することが重要と考えられた.

手技完遂率は全体で 74 % であったが, 完遂率は術式よりも目的手技の難易度によると思われた. これまでの経験では穿孔などの重篤な偶発症は発生せず, 術後症例においても比較的安全に ERCP を施行できると考えられた.